

二番芝居

作・小佐部明広

信山、伊達、有田が「寒い寒い」と言いながら現れる。

信山 どうも、信山E絃希です。

有田 有田哲です。

伊達 伊達昌俊です。

三人 よろしくお願ひします。

観客が拍手してくれなかったら、拍手を求める。

拍手に対してお礼を言う。

有田 ちょっと拍手の練習してみましようか。僕たちが、三人で頭

下げますから、そしたらみなさん、拍手してください。

信山 信山です、

有田 有田です、

伊達 伊達です、

三人 どうぞよろしくお願ひいたします。

三人、正座してお辞儀。

信山 はい、ありがとうございます。

有田 あざっす。

伊達 あざっす。

信山 寒い。

有田 寒い。

伊達 寒いね。

有田 僕ら今年の3月に東京行ってきたんですよ。東京に比べて、やっぱり北海道はさびーな。

伊達 観光じゃないですよ。お芝居しに行ったんです。

信山 あの、なんとか協会の、なんとかコンクールね。

伊達 で、今日はちょっと、東京でやった作品を札幌でも上演しよう。

有田 そうそう。……あんまり興味ないですか？ 興味なかったら帰りますけど。

信山 まあ東京でもね、こんな感じでだったら喋りながら始まったわけですけど。東京いじりとかいっばいやってね。

有田 東京の観客に、なんか話をふるんですね、そしたら会場しーんとなるわけです。で東京の観客は冷たいとかいう話になるわけですよ。

信山 そこで札幌の観客と東京の観客の違いとかやるわけですね。まず札幌の観客。

みんなワクワクして前のめり。

信山 わーすごーい。

有田 楽しいー。

伊達 おもしろーい。

信山 東京の観客。

斜に構えたり、姿勢の悪い感じで。

しばらくつまんなさそうに眺めてる。

信山 面白いんじゃない？

有田 あまりセンスが感じられないんだよなあ。

伊達 現代演劇の文脈を考えるとねえ、

信山 まあ札幌ですから、

有田 田舎臭いんだよなあ、

伊達 そろそろなにかのパクリはやめた方がいい。

みんな大きいため息。

有田 まあこの辺でちよつとひと笑いとかがあってね。

信山 まあさつきみたいいな札幌の観客見たことないですけどね、僕は。

伊達 実際東京のお客さんの方があつたたかつたよね。

有田 そうそう。

伊達 地元ネタもたくさんやりましたよ。

信山 そうそう、有名なCMソングとかね。北海道の有名なCM知らないでしょ、とか言つてね。 ♪北海道のいえく

ふたり 知らない知らない。

信山 ♪ばりばり夕張

伊達 ♪白い恋人

有田 ♪セイコーマート

信山 登別クマ牧場。

三人 の・ぼ・り・べ・つ（ああん！）といえば！

く・ま・ぼ・く・じよ！（くまぼくじよ！）

ゆかいな仲間が！ 楽しい仲間が！ イエア！

みんな待つてるぜい！ クマぼくじよ！

ここは登別！ クマぼくじよ！

信山 ここ、一番稽古しました。

伊達 これ実際に東京でやったんだぜ、信じられる？

有田 東京でやった映像見返したんだけどさ、そんなにウケでなかつたよね。

伊達 ポカーンだよな、知らないんだから。

信山 でも北海道のみなさんはたぶん「登別クマ牧場」ご存知だから、これ北海道でやったらウケるだろうって思つたら、まあだいたい（客席の反応は）こんな感じだよな。

有田 あとあれだね。♪サツポロイッチバン

三人 ♪みそラーアメン

有田 ちよつと声だしましよう。「♪サツポロイッチバン」つて言つたら、「♪みそラーアメン」ですよ。いきますよ。「♪サツポロイッチバン」

きつと観客は言わない。

有田 東京のお客さんは言ってくれたのに

三人 ねー。

伊達 これが北海道さ。

有田 もう一回。いきますよ？「♪サツポロイッチバン」

きつと言わない。

有田 もう一回！ 「♪サツポロイッチバン」

ちよつと言ってくれるかな？

有田 はい、ありがとうございますー。

信山 東京でね、「みなさんみそラーメン食べます？」ってきいたんですよ。そしたら全然東京の人たち手挙げないんですよ。東京の人たちみそラーメン食わないんですよ。びっくりしましたよ僕。東京の人たちになに食って生きてるんですかね？

伊達 「サッポロ一番みそラーメン」って、あれね、札幌の大衆食堂で、常連のお客さんが、豚汁にラーメン入れてくれて頼んだの。それが発祥らしいんですよ。1968年にサンヨー食品が「サッポロ一番みそラーメン」っていうインスタントラーメンを発売して全国に広まったんですよ。それ以来、みそラーメンといえば、札幌のご当地ラーメンっていう認識が広まったんですね。

有田と信山 へえー。

伊達 この前ウイキペディアで調べて僕たちも知りました。

信山 サッポロ一番の広告とかもらったきやよかったですね。こんなに宣伝すんだったら。

有田 ね。

信山 飽きてきました？ これ、なんとかコンクールの制限時間60分なんです。制限時間60分しかないのに、こんなんで時間潰してんですよ。

伊達 東京にアングラの帝王っていうのがいるんですけど、最後の講評のときに、その人に演劇ナメてるって言われましたからね。

信山 これもう芝居始まっていますからね。今まで一言一句台本のとおり進んでますから。

有田 セリフ言い間違えないかビクビクしてるからね。

信山 嚙んでるのとか、もう台本のとおりには嚙んでますから。

有田 あのなんとかコンクールっていうのは、審査員が最優秀賞を決めて、観客が観客賞っていうのを決めるんですよ。

伊達 その結果、我々はなんと！ 観客投票

三人 2位。

信山 いま「なんと」って言ったから1位かなって思ったでしょ。2位なんですよ。

有田 まあでもすごいことなんですよ、2位でもね。

信山 ちなみに審査員投票の結果は、ここでは言わないので、各自テキストに検索してください。

伊達 そう、ここで言ったら恥ずかしいからね。

信山 だからみんなね、さあ、東京で上演してきた作品みるぞ！

とかいう姿勢でみちやダメだからね。忘年会の余興なんかで面白いことやってるやついるなあ、くらいの感じでみてくださいね。

伊達 まあでも観客投票2位でもすごいよね。

信山 枕営業が功を奏したね。

有田 誰がやんだよこのメンツで。

信山 今音響席でみてるコサベさんだよ。

有田 ころ。

伊達 しかしまあ最終審査会、緊張したね。

信山 緊張した。

有田 したね。

伊達 それでは発表します！ 優勝は！
デレデレデレデレデレ……
有田 すごいニヤニヤしてますね。
信山 ほかの作品もみたけどね、
明らかにうちの作品が一番面白かった。間違いなく優勝。
伊達 デン！ コサベアキヒロ！
信山 ありがとうございます。
有田 わ、すごいですね！
信山 ま、ま、当然の結果だけどね。
有田 え、なんかおごってくださいよ。賞金もらえるんですよ。
お寿司。お寿司がいいな、回らないお寿司。
信山 わかったよ、なんでもおごってやるから。
伊達 あ、あ、すみません、見間違えました。訂正します。
優勝は、ニシムラシヨウ！
信山 え？
伊達 コサベさんは2位でしたね。
信山 ちよ、ちよと待ってくださいよ！
さつき優勝だって言ったじゃないですか？
伊達 間違いでした。
信山 間違いじゃすまないでしょ！
伊達 打ち上げいきまーす！ みなさん出てってくださいーい。
信山 ちよとあんた、くそ！
有田 惜しかったですねコサベさん。でも2位でもすごいですよ。
信山 うっせえ。(軽く咳き込む)ちよと飲み物買ってくる。
有田 わざわざ札幌から東京来たのにな。

伊達 今回の作品大変だったよな。
有田 コサベの演出もなに言っつつかよくわかんなかったし。
有田 大変でしたよねえ。
伊達 な。ところで俺と付き合ってくんない？
有田 え、私と？ いいよ。
伊達 あ、じゃあ、よろしく。
有田 ま、あの作品なら優勝は無理だったよな。
有田 2位でも奇跡ですよね。
伊達 最近コサベ調子にのってるからな。
有田 才能枯れてますよね。
伊達 なんか戯曲賞ノミネートされたり、演劇シーズンとかやって、あとクラアクなんとかっていう変な名前の団体つくって調子こいてんだよ。
信山 きこえてるぞ。
有田 あれ、コサベさん、自販機いったんじゃ。
信山 自販機むこうだったんだよ！
おいおいなんだお前ら、俺のいねえところですき放題言いやがって。
お前らそんなこと思ってたんだな。な？
伊達 うん。
信山 うんじゃねえよ。
なにサラッと付き合ってたんだ。お前ら役者はいつつもそう。
俺の知らないところでのいつの間にか付き合ってる。
(観客に)あれなんなんでしょうね。
共演者みんな知ってるのに俺だけ知らないの。
有田 さつきのは全部ウソですよ。

伊達 え、付き合うってのもウソなの？

有田 それはウソじゃないですけど。

信山 もういいもしいわかった、お前らのことはよくわかった。勝手に付き合えばいいじゃない。どうせ舞台マジックだよ。

舞台をつくる苦しさ？ とか、

舞台が終わった達成感？ とかで、

なんとなくその気になってるだけだから。

本番終わって一週間後くらいにデート行くじゃん？

あれ、いざプライベートで会ってみるとこれといって

共通の話題もないぞ。

うわあこの沈黙気まずいなあ。

特に用もないのにスマホ見ちゃうなあ。

久しぶり。久しぶり。

元気？ まあまあ。ふーん。

それぐらいいしか喋ってねえ。

なんでこの人と一緒にいるんだろう。

あー辛いなあ。このデート早く終わんないかなあ。

そうやって体験談みたいに話すのやめてください。

うっせえ！ 勝手にしろ！ じゃあなあ！

あ、行っちゃった。

飛行機の時間、ギリギリだけど大丈夫かな。

伊達 あいつ方向音痴だからな。まあ、でもなんとかするでしょ。

信山 あの、あの、す、す、す、すみません、

下北沢から来たんですけど、成田空港には、

どうやっていけばいいんですか。

伊達 成田？ 下北沢から来たの？ ここ所沢だよ。埼玉。

信山 あの、今から成田に向かったら、

この飛行機間に合いますか？

伊達 何時？

信山 16時40分です。

伊達 今は。

信山 16時13分です。

伊達 絶対無理だよ。

信山 あの、あの、僕、彼女とデートの約束があるんですけど、

間に合いますか？

伊達 何時に、どこで？

信山 8時に、すすきのです。

伊達 どこ？

信山 札幌です。

伊達 無理じゃないかなあ。

信山 そこをなんとか……。

伊達 私に言われても。

信山 そんなコサベはなんとか空いている飛行機を見つけ、北海道

新千歳に着いたのは午後9時15分。コサベがすすきのに着

いた頃には午後10時を回っていました。

いやー話し込んでたら飛行機逃しちゃって。

すごい俺のこと支持してくれる審査員がいてさあ、

若い審査員の方だったんだけど、その人はやっぱり

俺の新しい演劇を理解してくれて嬉しかったね。

有田 一番になれなかったんだね。

信山 まあ、やっぱり審査員もトシの人が多からね、俺の新しさが理解できなかつたんだろね。

(観客に)これ東京の審査員の前でこのまま言いましたからね。
東京の観客爆笑。

有田 へーそうなんだ。

信山 俺のことバカにしてんだろ。

有田 絶対に楽勝で優勝するとか言ってたのに、2位だったから。

信山 そんなこと言っていないじゃない。

有田 いいなやりたいこと仕事にしてるやつは。

信山 デザイン業界ってもうかるんだろ？

有田 そうでもないよ。

信山 やりたいことは金にならない。バイトと稽古に追われる日々。

有田 働けども働けども暮らしは楽にならず。

信山 そんなに飲んでいいの？ 明日、朝から取材なんでしょ。

有田 いいんだよ。

有田 昨日買い物したら福引の補助券もらってさ、

一等、箱根温泉のペアチケット。

信山 いいよ(行かないよ)。

有田 元気がないなあ。今度ご飯作りにいつてあげよつか？

信山 肉じゃが。あ、でも新しい包丁買つていけると嬉しいな。

信山 あの包丁全然切れないから。

有田 あーくそ、俺が評価されないのはおかしい。

信山 審査員が頭固くて俺の作品の新しさが理解できないんだ。

有田 だから、そんな飲んで大丈夫？

信山 うっせえ！ 俺は酒飲んだ方が早く起きれんだよ。

伊達 コサベくんね、もう社会人なんだから。

伊達 2時間も遅れてくるなんてありえないよ。

信山 はい、あの、母が急に倒れてしまつて。

伊達 遅れてくるならすぐ連絡する。

信山 コサベくんの都合は私に関係ないから。

伊達 はい、気をつけます。

信山 じゃあさっそくこの前のコンクールの話聞きこうと

伊達 思うんだけど。

信山 優勝は逃しちゃいましたね。

伊達 頭の固い審査員ばかりでしたね。

信山 審査員が違えば結果も違ったんでしょうけど。

伊達 私も東京でコサベさんの作品見させてもらってたんですけど。

信山 わかるでしょう、東京の審査員の思想の古さが。

伊達 あの作品はどういうものをイメージして作られたんですか。

信山 やはり演劇という概念のリバレーション？

伊達 平たく言うとかモンセンスへの反逆？

信山 僕ら芸術家って、常にモンセンスを疑う必要が

あるわけじゃないですか？

伊達 コモンセンスに鋭いメスを入れる？

信山 コモンセンスというのは？

伊達 いわゆる「常識」？

信山 それはイコール固定観念なわけですけど。

伊達 そのコモンセンスという皮膚を、するどいメスで切り開く？

信山 それが芸術家という人種に課せられた使命ですし、

伊達 パイオニアになるための必要条件だと思っただけですよ。

信山 はい、じゃあ東京旅行で楽しかったエピソードとか

伊達 ありますか。

信山 え、わかりましたか今の？

伊達 あ、今のはいい感じに要約しときますから。

信山 僕が言いたいのね、

そろそろ今の演劇にはターニングポイントが

必要なんじゃないかっていうことですよ。

だからつかさんオリザさんときてね、次に僕がくると。

伊達 ふっ。

今笑ったでしょ。

信山 東京での面白エピソードとかあります？

伊達 ないですよ。

信山 迷子になったって、この前ダテ君からききましたけど。

伊達 いいじゃないですか。

信山 これ、私個人の意見なので気にしないで欲しいんですけど。

伊達 なんですか。

伊達 コサベさんの作品って、俺たち新しいことやってるぜ、

みたいな気持ちはすごく伝わって来るんですけど、

なんか酔ってる感じ？ 酔ってるって、酔っ払い？

酔っ払いって、勢いあるけど中身の無いことばかり

喋るじゃないですか。

なんか演出とか脚本が酔ってるんですよ。

なんかもつと的確な、簡潔な言葉があると思うんですけど。

あ、「すべってる」。すべってるんですよ。

そう、「すべってる」がしっくりきますね。

なんか、新人のお笑い芸人が自信満々にネタやって、

客席しーんみたいな。そう、すべってるんですよ。

あ、ちよつと私時間ないんですけどもう行きますね。

あとで、メールに送つといてください。迷子の話。

お疲れ様でした。

信山 あーそう、ふーん。俺の作品には価値がねえんだ。

わかった、じゃあこっちにも考えがあるよ。

有田 というわけでコサベは劇団員を集めて

ある発表をすることにした。

信山 みなさん、今日はわざわざ集まってもらってありがとう。

今日はみなさんに重大な発表があります。

驚かないで生きてください。

わたくしコサベは、今日をもって演劇をやめることにします。

これは、今の演劇界にとって重大な損失になるかも

しれません。仕方がありません。

文句は今まで僕を正しく評価できなかった

日本の演劇界に言ってください。

なにか質問や意見のある人はいますか。いませんか？

何を言ってもいい、最後のチャンスかもしれないですよ。

なにかないですか？

なんで辞めるんですか、とか。

辞める必要はないんじゃないですか、とか。

辞めないでください、とか。

私たちにはコサベさんが必要なんです、とか。

もしかしたらそういうことをいうのは

恥ずかしいかもしれない。

でもここで言わなかったら後悔するかもしれない。

だって、もうコサベは辞めるって言ってるんですよ。いいの？

俺辞めちゃうよ？ コサベ辞めちゃうんですけど。

なにか最後にいっておきたいことはないですか？

え、ないんですか。本当はあるでしょう。

まあすぐにはね、言葉にならないかもしれない。

3分待とう。3分の間に、今の気持ち、言葉にしてみよう。

お、みんな考える気がなさそうだね。ないのかな？

ないはずないよね。ある。あるはずだ！

なにか言いたいことあるよな！ な！ あるよな！ な！

伊達
はい。

信山
ああ！ あるよね！ よかったよ。はいどうぞ。

伊達
コサベさんが劇団辞めたら、俺が代表やってもいいですか。

有田
お。いいね！

伊達
賛成！

有田
え、じゃあ私脚本書いてみたい。

伊達
マジで！

有田
メッチャ楽しみ！

伊達
じゃあ僕が演出やってもいいですか？

有田
お、いいじゃん、やってみようよ！

伊達
ようし、それじゃあ頑張るぞ！

有田・伊達
オー！

有田
あれ、コサベさん、まだいたんすか？

伊達
長いあいだお疲れ様でした。

有田
お疲れ様でした。

伊達
っていう具合でコサベさん劇団追い出されたわけ。

伊達
へー。

有田
そしたらこの間久しぶりにコサベさんみたの。

有田
夜のすすきで。

有田
とぼとぼ歩いてて、時折ビクツとしてるわけ。

よくわかんないんだけど。

あの辺たまに酔っ払いみたいなの占い師いるじゃない。

コサベさん、ふらーっとその人のところ行ってさ。

兄ちゃん兄ちゃん兄ちゃん兄ちゃん、って、

なんですか、

悩んでるでしょ。

わかるんですか。

伊達
わかるよ占い師なんだから。占おうか。

伊達
俺の言うとおりにしたらよくなるよ。

伊達
手見せて。オッケーオッケー。

伊達
ちよつと顔触るよ。

伊達
あーなるほどね、わかった。全部わかった。

伊達
胡散臭いなあ。

伊達
兄ちゃん、「疑う」っていうの、好き？

伊達
はい？

伊達
そのまんまの意味。「疑う」っていう行為が好きなのかって。

伊達
わかんないです。

伊達
例えば彼女が男友達と飲んできたとか言っさ、浮気疑う？

伊達
疑います。

伊達
それ。兄ちゃんそれだよ。基本ひとのこと信じないでしょ。

有田
わかんないですけど。

伊達
なにかうまくいかなかったら、

伊達
周りの人間が悪いとか思うでしょ。

有田
状況によりますけど。

伊達
それ。そういうこと。おじさんなんでもわかっちゃうよ。

伊達
もつとなにかを信じたほうがいいよ。

信じるだけで、人間すごい力を発揮できるからね。
よくわかんないす。

有田 ラッキーナンバーは1番。

1のつくもの身の回りに置いといた方がいい。

「一番搾り」とか「サッポロ一番みそラーメン」とかね。

アンラッキーナンバーは2番。

2のつくものはなるべく避けた方がいい。

2はキミにとって不吉な数字だからね。

有田 あ、僕、演劇のコンクールで2番だったんです。

伊達 最悪だね。まだ4位の方がよかったです。

2は避けるんだ。いいか。

じゃないとキミ、アンラッキーになるから。

俺の言うこと信じればいいことあるよ。

なんかあつたら電話して。名刺。

って占い師と話してるの俺の友達がきいたって言っててさ、

そのあともつけてついたらしいんだよ。

そしたら、そのコサベが度々ビクツとしてるわけ。

有田 電車、まもなく2番ホームに到着いたします。

信山 なんだろう、なんか変だな。

伊達 明日2時ね、オッケー。

信山 なんだろう、体がビクツとする。

有田 お前そういうの、「二階から目薬」って言うんだよ。

信山 ああわかった。「2」だ。

伊達 コサベの体は「2」という数字に敏感

になってしまったのでした。

3

有田 ポン、ポン、ポン、ポン、ポポン！

信山 コサベいわく、世界は2で溢れておる。

西暦「2」016年。

有田 ポン！

信山 「2」1世紀。

有田 ポン！

信山 「二」重あご。

有田・伊達 はあ！

信山 コサベのはじめに困りしことは、

大好物であった雪見だいふくを

食べられなくなったことじゃ。

有田 ポン！

信山 2つ並ぶものが耐えられないという。

伊達 はあ！

信山 コサベは、街に溢れる様々な「2」に気づいてしもうた。

二人 2人並んで歩くカップル。タイヤが二つ並ぶ自転車。

信山 コサベは街を歩くことができなくなってしまった。

コサベはあることに気づいてしまったのじゃ。

それは、

三人 おっばいの存在である。

有田と伊達 (おっばい、おっばい、

おっばい、おっばい……)

信山 街に溢れしおっばい、コサベの心を打ち砕く。

カバンをたすき掛けする女、通称パイスラッシュユ女、
コサベの心を狂わせる

伊達 しかるに、コサベは彼女とも会えなくなってしまったのか。

信山 それは問題ない。

有田 いよお！

伊達 なにゆえじや。

信山 コサベの彼女は、

有田 ポンポンポンポン！

信山 貧乳であったのだ。

伊達 おお！

信山 (有田の胸を触って) あ、あ、うん大丈夫。

伊達 カン、カン、カン、カン、カカン！

有田 おざつす、あれ今週コサベさんシフト入ってないんすか？

伊達 辞めちやっただよね。

有田 マジすか。

伊達 おっぱいが怖くて働けませんって。

有田 あーダメだ。僕コサベさんのそういところホントだめつす。

信山 最近では、自分の手が2本あることも気になり始めた

コサベだったが、そこはなるべく考えないようにした。

コサベは、大学の演劇サークルで同期だった

唯一の友人と自宅で飲んでた。

信じるっていうのは、あれは思い込みなんだよ。

要は実際にそうである必要はなくて、

そうだって思い込むことが重要なんだよ。

演劇もそうで、例えば登場人物が死ぬ。

でももちろん役者は死なないよ。

ここで重要なのはさ、死ぬっていうことを
写實的に表現することじゃないんだよな。

観客が、登場人物が死んだって信じられればいい。

演劇ってのは全部ウソなんだよ。

そのウソのかたまりでもって本物を作んなきゃいけない。

これがややこしい。

舞台上で人が死ぬ。これはウソだ。

でも登場人物は死んだってことになってる。

お客さんがそれを信じる。例えば悲しくって涙を流す。

これは本物なんだよ。

悲しいとか、涙を流すとか、これはウソじゃないんだよ。

本物なんだよ。

だから僕らがやるべきことは、

舞台上でウソをつくことじゃない。

重要なのは人が死ぬことそれ自体じゃなくて、

人が死んだ時の悲しさ、とか、喪失感、とかなんだよ。

役者が悲しんでる必要なんかなくて、

観客が悲しけりゃいいんだ。

役者が悲しいのはウソだけど、

観客が悲しいのは本物なんだから。

役者ってのは、演劇ってのをこっち側(舞台)でやっていると

思ってるんだけど、本当はそっち側(客席)でやんなきゃいけ

ないんだよ。

だってこっち(舞台)なんてウソしかないんだから。

本物があるのはそっち(客席)なんだよ。

そっち(客席)の本物作るためにこっち(舞台)で一生懸命

ウソついてんだよ。

だから信じてもらえりやなんでもいいの。

そう考えると、それに必要ないものってのは省けるわけ。だから落語なんかはひとつの究極形態だよ。演劇の。

出演者ひとり。道具は扇子と手ぬぐい。

歩かないし立ちもしない。音楽は登場と退場だけ。

照明も変化なし。あれウソのかたまりだよ。

でも、観客は信じるんだよ。それが本物なんだよ。

まあ、コサベのコモンセンスに反逆するときか

ワケのわからない話を聞き流しているときに、

僕はそんなことを考えたんですけどね。

コサベはそのことよくわかってないと思うんだけどね。

俺はあいつらのこと信じてたんだよ。

あいつらのために脚本だって書いてきた。

演出もやってきた。事務仕事だってしてきた。

なのにあいつらの態度。

信じるっていうことの、水準が低い。

信じてたってことにしてるだけで、本当は疑ってたんだよ。

裏切られたってことになるから。被害者でいられる。

実際は自分が一番偉くて、他人はバカだと思ってる。

信じてる。

人間、自分に都合のいいことは信じる。

都合の悪いことは疑う。

そうやってやったんだよコサベに。

もちろん、ものすごくオブラートに包んでね。

有田
いや俺は信じてた。

信山
そういうこと言うヤツほど信じられないけどね。

それは言わなかったけど。でも要は、

お前は信じてもらえてなかったってことなんだよね。

有田
あのもしもし、ああいえ、なにということはないんですけど、

なんだか電話したくなって。

ええ、あーはい、行きます、はい。

伊達
よくきたねこっちこっち。

有田
なんかすみません。

伊達
3000円。

有田
あ、ああ、

伊達
仕事でやってんだから。なに？ ああ言わなくてもわかるよ。

嫌なことあったんだろ。

有田
わかります？

伊達
占い師なんだと思ってたんだよ。

お前のことだいたいわかってるよ。

おう、酒飲め酒。いいよいよ俺のおごりだよ。

お、お、お、あああ一気に全部飲めよ。

そうそうそう。こういうときは酒を飲むのが一番。

さつきから気になってたんだけど、

すごい目え細めてるけどどうしたの。

有田
あの、おっぱいが目に入らないように。

伊達
は？

有田
街を歩いている女の人のおっぱいが怖いんですよ。

伊達
お前そんなこと言ったって女やらねえぞ。

有田
はい？

伊達
だからあるだろ落語に。饅頭怖いって言って、

実際に饅頭やったらバクバク食ってて、

本当はなにが怖いんだってきいたら、

今度はお茶が怖いっていう話。

なんでピンと来てねえんだよ。

なにお前、本当におっぱい怖いって言ってんの。

なにが怖いのか？

おっぱいって、ふたつ並んでるじゃないですか？

うん。

だからです。

はあ？ はあ、なるほど。「2」だ。

最近めつきり「2」がダメなんですよ。

なるほどねえ。まあでもそれはいいことなんじゃねえかな。

2番がダメってことはだよ、

お前はもう1番になるしかねえんだよ。

お前は嫌でも1番になる男ってことだよ。

そうですか。

そうだよ。お前演劇やってんだろ？

俺の言うとおりにしてりやすぐに演劇で1番になれるよ。

本当ですか。

本当だよ。俺はお前のことはだいたいわかる。

お前の将来も俺の目には見えてる。

信じていいんですか。

信じる信じる。いいか、まずは何回も口に出して唱えろ。

俺は1番になる。俺は1番になる。言ってみろ。

俺は1番になる。

伊達 恥ずかしがらない。

有田 俺は1番になる。

伊達 その調子。

有田 俺は1番になる。

伊達 何回も。

有田 俺は1番になる。俺は1番になる。

伊達 俺は1番になる。俺は1番になる。

伊達 そう、これは毎日やることな。そしたら次はひとに言うこと。

俺は1番になる。これをなるべく多くの人に言うんだ。

ひとに言ったことってのは実現しやすい。

恥ずかしそうな顔してんじゃねえよ。

じゃあ試しに俺に言ってみろ。

俺は1番になる。

有田 俺は1番になる。

伊達 そうそう。

有田 でも、僕あんまり友達いないんで、

伊達 劇団やってんだろ。劇団員たちに言ったらいいんだよ。

おめえ1番にならなくていいのか？

有田 よくないです。でも、

伊達 でももへちまもないよ。

いいんだよお前は1番になる男なんだから。わかったな。

あとそうだな、

1番のつくものをなるべく毎日体に取り入れたほうがいい。

一番搾りがいいな。え、ビールだよビール。

6缶1セットで売ってるだろ。毎日6缶ずつ飲め。

その方が6倍早いスピードで1番になれるから。

伊達 俺のいうことひとつでも守れないと、

お前1番になれないからな。わかったな。
はい、3000円。え、じゃないよ仕事でやってんだから。
払ってないでしょ、いつもらった？

お前ね、酔っ払ってるからっていい加減なこと
言っちゃダメだよ。

はい、ありがとう。じゃあ帰りに一番搾り買ってけ。
劇団員にも1番になるって言うんだぞ。わかったな。

信山
おい劇団員たち、お前たちに言うっておきたいことがある。

俺は1番になる。わかるか？ 1番だぞ1番。

日本で、いや世界で1番の演出家になる。

どういうことかわかるか？

お前らも1番にしてやるってことだよ。

俺が世界一の演出家になる。この劇団も世界一の劇団になる。

そしたらお前らだって世界一だよ。

だからお前らは信じていい。なにも疑う必要はない。

俺についてくれば、間違いない。

みんな今まで本当にお疲れ！

もうみんなバイトなんかやめていい！

テレビドラマとか、映画とか、CMとか、今年は忙しいぞ！

伊達
なににきたんすか？

信山
だから、おめえらを一番にしてやるっていいに来たんだよ。

大丈夫。全然信じていい。俺がお前らを一番にしてやる。

伊達
酔っ払ってんすか？

有田
わたし達で頑張りますから。部外者は帰ってください。

信山
俺はお前らのことを信じてる。

伊達
僕たちは信じてないっす。

有田
はいはいはい、お疲れ様でした。

信山
おいおめえら。俺はお前らのこと信じてやってんだぞ。

有田
信じてもらわなくて大丈夫ですから。

信山
わっかんねえなあ。お前らは何者なんだ？

偉いのか？ え？ いち役者の分際でさあ。いいか。

脚本っていうのはな、0から1を生み出す仕事なんだよ。

おめえら俺が書いてるセリフ読んでるだけじゃねえかよ。

それでお前らカッコイイとかカワイイとかファンですとか
言われてさ。

お前らそれで満足なのか？

お前らは0から1を作り出してんのか？

有田
確かに私たちは0から1は作り出してませんけど、

コサベさんが0から生み出した0.001を、

なんとか1にしています。

信山
あーそうか、俺が生み出してんのは0.001か。わかった。

じゃあおめえらで、つまんねえ脚本と、つまんねえ演出と、

つまんねえ俳優と、つまんねえスタッフ陣で、

1番つまんねえ芝居つくればいいよ。知らねえぞお前。

あとで泣いて土下座してももうお前たちなんか

助けてやんねえからな。

お疲れ様でした。

有田
え、ペーヤんじゃない？

伊達
え？

有田
久しぶりー、えーちよつとー、

伊達
やばい、うける、なにしてんの、

有田
あ、あ、あの、

伊達 やべー、かわんなーい、まじべーやん、
有田 あ、あ、なにしてんの。

伊達 わたしー？ かんごしー。うけるしょ？

かんじやさんかわいそうだよねー。

有田 あ、あ、はは、

伊達 えーいまかえるとこー？

有田 ん、あ、うん、俺、僕？ 司法書士になったんだよ。

わかる？ 不動産の登記とか、わからないですよ。

抵当権はきいたことありますかね。

不動産の物権に関わる申請をする仕事なんですけど。

へーわかんないけどすごいね。

有田 この前複雑な案件任されてさ、

事務所の他の連中はお手上げだったんですけど、

なんか俺？ 僕のあれで解決して、給料もあがつてさ、

でもそんなにお金もらっても、趣味とかあんないし、

どうしようかなーって感じ？

伊達 えーすごいじゃーん。

有田 まあ、そんなにすごいあれじゃないんですけど。

あ、あ、(目を覆う)

伊達 なに？

有田 おっばい、

伊達 え？

有田 ううん、

伊達 えー結婚してんの？

有田 してないかな？ 候補はたくさんいるんだけど、

結婚ってあんまり興味ないんだよなー。

いざとなれば別に選べるし、

伊達 モテてんだー。

有田 まああんまりモテてるっていう感じでもないんだけど。

でも世間的にみればモテてるのかな。 あ、今帰るとこ？

飲みにもいかない？ おごるよ。

伊達 えーうれしー。かんぱーい。

わーこんなにお酒飲んだの久しぶり。

有田 好きなだけ飲んでいいよ。

伊達 あ、やば、終電。

有田 あ、ウチ近くだから泊めるよ？

俺、家にこだわりなくてさあ、

金ある割に狭いとこなんだけど、それでも大丈夫？

伊達 あ、でもタクシーで帰るかな。

有田 もったいないよ、泊まればいいって。

伊達 うんじゃあ。

有田 シャワー浴びる？

伊達 大丈夫。

有田 パジャマ俺のだったらあるけど。

伊達 ううん。大丈夫。寝るね。

有田 (おっばいを触る)

伊達 え、え？

有田 (かなり息を上げながらおっばいを揉む)

伊達 ちよ、ちよ、

有田 怖くねえ、怖くねえぞ、怖くねえ！

伊達 ちよつと、やめて、(殴る)

有田 いった。

うわーいった、え、いってえわ。これはないわ。信じらんない。

伊達 え、酒飲ませてもらって殴るか普通？

有田 お前バカのクセにやらせてくもくれないの？
なんの価値があんの？

伊達 人のことそんな風にしか見られないなんて、かわいそうだね。
お前、もうちよつと賢い人間だって、

有田 信じてただけどな、俺。

伊達 どうせ司法書士とかウソなんでしょ。わかってるから。

有田 なめんな。人ってお前が思ってるよりバカじゃないからな。
そういう人は誰からも信じてもらえないんだ。さみしい人。
ため、

伊達 襲えばいいじゃん。すっげーつまんなさそうにしてるから。
へたくそ、ちっちゃえ、死ぬ、なんでも言ってるから。

有田 プライドめちやくちやにしてやる。

有田 これだから女はダメなんだよ。

お前たちはそうやって男のプライドを傷つけるのが
趣味だもんな。

男のこと見下して、心配するふりして笑って、
でもお前らが同じことされたらすぐ被害者ヅラだよ。
だからお前は信じられねえんだ。

伊達 意味わかんない。信じられてないのはそっちでしょ。
わー、そういう系の人だ、人生楽しめない系の人だ。
なんで生きてんの？ かわいそー。

有田 もう二度とツラ見せん。バン！
ためえは楽しいの水準が低いんだよ。

三流は三流の娯楽で楽しんだりやいい。
俺が目指しているのは新しいことだから。

(酒を飲む) ああくそ。

(蛇口をひねる) ん？ (何度もひねる) ん？
うそだろ。もしもし？

あの、あのその、はい、はいそうです、
わかるよ、こういうときいつつもそういう声で
電話かけてくる。

必ず返すから。

コンビニやめたのに？

信山 あの、来月から、演劇で生活できるメドがたってるんだけど。
大きな仕事もらって。

有田 すごいね。

信山 そう、すごいんだよ。

みんなが知ってるような女優さんの事務所から
オフアキーきてさあ。

あ、このまえ朝ドラも出てたな。
まだ情報解禁前だから言えないんだけど。

めっちゃびっくりするよ。うん、だから、大丈夫。

※無料版はここまでです。ご覧くださりありがとうございます。
た。全編はクラアク芸術堂の販売ページ(左のURL)から購
入できます。ありがとうございます。

<http://www.clark-artcompany.com/public>

あとがき

2016年の3月に「若手演出家コンクール」の最終審査で、東京でなにか60分以内の作品を上演することになった。舞台装置を持って持っていくとなるととてもお金がかかる。しかも仕込み2時間、撤収1時間で終わらせなければならぬという条件もあった。そういうった条件だったので、開き直って、なんにもいらぬ舞台をつくらうと思ったのが、この作品をつくったきっかけだった。舞台装置なし、照明変化ほとんどなし、音響なし、小道具なし、というないづくしのなか、役者の喋りだけで60分やろうと考えた。喋りがメインで演じるといえば、落語だ。落語の映像をたくさん皆がら、どんな演劇にするか考えた。

劇団結成から時間も経ち、20回を超える公演をやっていたら、いろんなことがあったり、いろんなことを思ったりする。もちろんここに書かれていたことをそのまま思っているわけではないし、ほとんどがフィクションではあるのだけど、それでもやっぱり僕の体験とかがもとになっている。最終審査の結果は惨敗だったけれど、これはこれでいい作品になったんじゃないかなと思っている。

この台本を書いたのは2016年の1月で、このころは、妬みとか、みじめさとか、そういうものに関心があったんだと思う。(そして、今もやっぱりそういうところに関心があるんだと思う。)きつと、そういう人間の負の感情に関心があるんだと思うし、そういうものの方が舞台上で見ると見ごたえがあるんだろうなと思っている。この作品は、最終的にはちよつと幸せな感じになった。やっぱり落語ベースで考えていたので、そういうところに落ち着いたんだと思う。最後のオチがばしつと決まると気持ちいいんだろうな、と思っている。

2016年11月7日(月) 小佐部 明広

《上演記録》

若手演出家コンクール2015優秀賞受賞記念公演『二番芝居』

【キャスト】

信山E紘希（劇団アトリエ）

伊達昌俊（劇団アトリエ）

有田哲（劇団アトリエ）

【スタッフ】

演出・脚本 小佐部明広（劇団アトリエ）

舞台監督 米沢春花（NPO法人コンカリーニョ）

照明 高橋正和

衣装 山木眞綾（劇団アトリエ）

宣伝美術 八十嶋悠介（TBGZ./マイペース）

制作 加納絵里香（劇団800階）、後藤夏実

【日程】

2016年11月11日（金） 16時

12日（土） 16時半

【会場】

生活支援型文化施設コンカリーニョ

【料金】

一般 1800円

養虫割引 1500円

25歳以下 1000円

※実際の上演内容と一部異なる場合があります。ご了承ください。

2016年11月8日 第1刷制作

2017年10月4日 第2刷制作

《『二番芝居』の上演について》

「一般前売入場料2000円未満」または「公演予算100万円以下」の場合は、脚本使用料は無料です。それ以外の場合は、協議の上、総予算の3%程度を上演許可料とします。上演のお問い合わせはクラック芸術堂企画運営委員会まで。

【クラック芸術堂企画運営委員会】

clark.artcompany@gmail.com